

【優秀賞】

ゆうゆう de やろうよ！

～入居者の『やりたい』を形に 5年間の試み～

浜松〈ゆうゆうの里〉 生活サービス課
○影山智英 當麻恵里 梨子田幸代 山田諒

【はじめに】

〈ゆうゆうの里〉は「介護付き有料老人ホーム」だが、介護を必要としてから、あるいは、介護を受けるために入居する施設ではない。元気な内に入居し、介護や医療支援に裏付けられた安心のもとに人生のプライムタイムを存分に楽しんでもらうコミュニティである。

【目的】

有意義な人生を送るためには、夢と希望にチャレンジする「生きがい」が欠かせない。入居者がいきいきと過ごしてもらうために、主体的な活動を支援することが必要である。5年前に入居者のAさん夫妻から「所有しているお雛様を文化財保護のため、今後ある団体に寄贈する予定でいる。歴史的価値もあるお雛様と日本人の優しい風習について、〈ゆうゆうの里〉の入居者に知っていただきたいと考えているけどどうだろう。」と相談を受けたことがすべての始まりだった。『お雛様物語』を始め、それ以降『創立45周年のルーツを聖隷を訪ねて』『三方原合戦史跡めぐりウォーク』など、Aさんと8つの企画の実現に向けて取り組んだ。

【方法】

Aさんと打ち合わせを行い、どのようなことを目的として実施するのか確認。

聖隷福祉事業団などの外部が関わる時は外部とのスケジュール調整。

参加者アンケートを取り、参加者の満足度や今後の課題の確認。

・倫理的配慮

アンケートで収集した個人情報に関して、適切にデータの管理を行い、公表にあたっては個人が特定できないように配慮した。そして研究参加者の意向を確認した後に、同意書に署名をもらい研究を行った。

【結果】

8つの企画で合計226名の入居者が参加された。(浜名湖エデンの園入居者含む)

・6つの講座 参加者 合計194名 ・2つの外出企画 参加者 合計32名

これにより入居者ブログの活性化に繋がった。生活サービスステーションに、参加された入居者が企画について話をしに来てくれることも増えた。Aさんの後に2名、講座の講師を担当したいなどの声があがり、後に続く方たちが生まれた。

【考察】

講座や企画に参加された入居者は講師役の方はもちろん、参加者同士の会話も弾み、アンケート結果からも入居者同士の交流が深まったことが分かった。ここ数年のコロナ禍により、フレイル予防を促進する動きが活発化しているが、これらの取り組みも趣味や特技を活かした社会参加としてフレイル予防に繋がっているのではないかと考えられる。

【結論】

やりたいことを形にする支援を経験したことは、私たち職員の力になり、入居者も元気になることが分かった。そして、Aさんとの5年間の取り組みを通して、入居者からの「やりたい」の気持ちを募って形にする仕組みづくりが必要だと気付いた。

そこで、入居者の「やりたい」の声に応えるシステムとして、今年10月から『ゆうゆう de やろうよ！』の運用を開始した。私たちが経験したことで、主体的な活動へと発展させることができた。これからも入居者が有意義な人生を送ってもらうために『やりたい』の声を大切に日々取り組んでいきたい。

【優秀賞】

なぜ内出血ができてしまうのか？

～内出血を防ぐためにできること～

伊豆高原〈ゆうゆうの里〉ケアサービス課
○大串朋哉

【目的】

ケアサービス課新館では内出血を防ぐ対策として、内出血がしやすい入居者には、ぶつけてしまった際、衝撃を和らげるために腕や脚にアームウォーマー・レッグウォーマーで保護したり、室内で動いた際、ぶつけてしまいそうな箇所にクッション材を巻いたり様々な対策をしている。2023年1月～6月の期間で22件起きており、その内13件がベッド上で過ごす時間が多い入居者で起きていた。詳細をみると「腕を持ってしまったような痕があった」「手摺りにぶつけたような跡があった」といった内容で、内出血の発生原因の1つとして、職員の介助方法にも課題があると感じた。そこで職員に内出血の正しい知識と安全な介助方法を学んでもらうことで内出血に対する意識の変化、移乗や体位変換時にも気を配るようになり、内出血の発生を防ぐことができるのではないかと考えた。

【方法】

対象:ケアサービス課 新館 介護職員 15名 期間:2023年6月～9月。

1. 職員に現在の介助方法と内出血についてのアンケートを6月に実施。
 2. アンケート結果を元に資料を作成し、内出血の勉強会を7～8月に実施。
 3. 介助方法の統一を図るための申し送りを7月に実施。
 4. 勉強会後の意識調査を職員に8月に実施。
 5. ベッド上で過ごす時間が多い入居者3名を選出。勉強会前4月～6月と勉強会後7月～9月の3か月の期間で内出血の発生件数を比較。全体の内出血発生件数も同様に比較。
- 倫理的配慮：アンケートで収集した個人情報個人が特定されないように配慮した。

【結果】

対象の入居者3名で内出血の発生件数を比較した所、Aさん3件から2件、Bさん1件から0件、Cさん1件から1件と減少傾向であった。全体の発生件数は、6件から13件と増加してしまった。勉強会後の意識調査アンケートの結果、「擦ったりするだけでも内出血ができるとは思っていなかった。注意して介助していきたい」「内出血は血管が破れて、出血していて、ご入居者の方にケガをさせているという認識が薄かった。今回の勉強会で認識が強まった」「皮膚の乾燥によって弾力が失われ、内出血がしやすいことがわかり、保湿も重要ということがわかった」といった意見がみられた。

【考察】

職員に内出血の正しい知識と安全な介助方法を学んでもらったことで、ベッド上で過ごす時間が多い対象の入居者3名の内出血の発生件数は減少傾向だった。一方全体の発生件数は増加がみられ、その内訳として室内を一人で行動する入居者が13件中8件であり、さらなる対策を講じる必要があると考える。

【結論】

今回の取り組みで、職員の内出血に対する意識や介助方法を改善の一旦を担うことができた。今後の課題として①内出血が発生しても対策がたてられていないことがあるため事故報告書作成の徹底、②その報告書から原因を探り、入居者の行動を予測した対策の強化、③皮膚の乾燥が目立つ方をみかけるため皮膚の保湿の強化、④移乗が安全かつスムーズにできるようスライディングボードなど福祉用具活用の検討などしていき、内出血を防ぐ取り組みを続けていきたい。

【優秀賞】

介護のデジタル化で入居者 QOL と職員の働きやすさが向上

～見守りライフの導入～

佐倉（ゆうゆうの里）ケアサービス課

○松本崇志 本田稔幸

秋吉恵 新田歩惟

【目的】

介護現場におけるデジタル化の推進は、入居者へのサービス向上はもちろん、職員の負担軽減にも繋がり、現場は大きな期待を持っている。財団でもデジタル化を推進すべく、佐倉施設をパイロット施設とし、ケアセンターへの Wi-Fi 設置と「見守りライフ」の導入を行った。「見守りライフ」はベッド上の動作を検知、体動測定から睡眠状態を判定し、安否確認の見える化、生活リズムを踏まえたケアプランの活用など、多くの場面で職員の負担軽減が期待できる高齢者見守りシステムである。本研究では、このシステムが持つ機能のうち睡眠状態が一目でわかる機能を用い、夜間の訪室介護を見直すことで入居者の睡眠状態が改善され、職員の負担が軽減することの検証を行うこととした。

【方法】

取り組み期間：2023 年 7 月～10 月

- ・7 月：「見守りライフ」の機能などについて、職員や対象となる入居者に説明。
- ・8 月：「見守りライフ」の設置(111 台)
- ・9 月：開始前データ収集：夜間、安否確認のみを行う入居者（以下、対象者）の睡眠時間データ収集／夜勤職員の歩数データ収集、改善が期待される個別ケースの選定。
- ・10 月：取り組み開始：対象者の訪室介護内容変更（安否確認をシステムによる確認に変更）、睡眠時間および夜勤職員の歩数データ収集。取り組み前後のデータ比較。
- ・倫理的配慮

本研究では入居者の個人情報には表示していない。

【結果】

- ・夜間、排泄介助が必要な場合は、覚醒している時間に対応し、入居者の睡眠を妨げることがなくなった。安否確認のためだけの訪室介護 38 件が 10 件に減少した。
- ・夜勤業務職員の歩数は、導入前 16,385 歩、導入後 15,787 歩で、598 歩減少したが、大幅な減少とは言えない結果となった。夜間、職員の対応が必要となる個別ケースについて、転倒が続いた入居者の睡眠状況を確認したところ、夜間の睡眠時間が少ないことが判明しケアプランの見直しを行ったなど、プランの変更に結びついた事例が確認された。

【考察】

デジタル化による「見守りシステム」導入は、入居者の生活の質の向上、および職員の負担軽減にメリットがあるものだというを実際に体感することができた。

【結論】

このシステムを活用し、「科学的」なケアプラン見直しにより解決できることが多くなると予想できる。また、職員の負担軽減については、プラン見直しの他、デジタル機器の連動により、さらに効果が期待できる。今後も「デジタル介護」により、現場のさらなる改善に努めたい。

【優秀賞】

早期離職は防げる！

～3年定着率を上げる仲間づくり～

本部 人事総務部

○木曾千枝加 楠本直登 野上真弓 安藤美乃里

【目的】

「離職」。それは総務にとって最も悩ましい問題だ。離職が決まると、ヒアリング面談、退職金計算、退職稟議起案、社会保険の手続きがあり、次に人材補充のための採用活動、面接準備、入職給与計算、入職稟議起案など一人の離職だけで通常業務に膨大な作業が追加される。多い時には同時期に何人も離職するため、施設も本部も退職手続きと次の採用に追われることとなる。近年、転職をもてはやすようなCMが多く流れ、その風潮が加速しているが、新卒入職した大切な人財の早期離職を防ぎ、財団の文化を築けるような人財を育てるために、本部人事総務部だからこそやらなければならないことに取り組んだ。

【方法】

人事総務部では、2021年より人財確保のため階層別研修を最重要視し、従来の入職前研修、1・2・3年目研修に加えて、入職から3か月後に、働くことの意味を自覚し、モチベーションを向上する目的で「新入職員フォローアップ研修」を追加した。次に内定から入職までの期間に複数回「懇親会」を開催し、同期同士の交流と財団への愛着心を深めてもらった。研修後は研修報告書のみならず、各講義の満足度、実務に役立つ点、合わない点、研修への要望などのアンケートを取り入れ意見を吸い上げ始めた。2022年からは研修のテーマのひとつに「あたたかい研修」を掲げ、研修委員と本部事務局全員で意識を統一し、「同期とのつながりを大切にする」研修を行ってきた。グループワークを増やし、ゲームや協同作業を導入するなど、同期がつながるきっかけを作れるように工夫した。また研修前に必ず上長による面談を行い、内発的動機付けを行ってもらった。このような「あたたかい研修などの新たな取り組みが定着率に寄与している」という仮説の元、2008年～2022年の15年間の新卒採用職員の入職数、退職数と1・3年後の定着率、退職理由を分析した。

・倫理的配慮：本研究において、個人を特定できる情報は一切含まれていない。

【結果】

2008年～2022年に新卒採用職員322名が入職し、そのうち2023年4月時点在籍者は135名(41.9%)だった。自己都合退職182名のすべての退職理由を確認したところ、1位「転職」52名、2位「病気(心身)」32名、3位「介護・家庭の事情」29名だった。総務が対応できる原因である「人間関係」と「仕事の不満」を合わせると29名と3位同率となり、この数字を下げることが目下の急務だと判明した。定着率でみると2018年は1年後78.6%、3年後57.1%だったが、1～3年目研修が軌道に乗った2019年は1年後定着率100%、3年後82.4%、2020年は1年後定着率93.3%、3年後80.0%と着実に効果が表れた。そのためここ2年は、厚生労働省が公表している2020新規大卒者3年離職率の31.2%より10%以上離職率を下げる事ができた。

【考察・結論】

階層別研修の形が完成したのは2021年。3年後、5年後の離職率が出るのは来年以降のため、まだ数値による効果は不明である。しかし、昨年からの研修報告書には、「同期から刺激を受けた」「同期と悩みを話せ気持ち楽になった」などの感想を研修生の88%以上が持ち、研修生達が自施設だけではなく7施設に頑張っている同期がいるということに気が付き始めたように思う。この取り組みを進めていくことで、同期が仲間となって相談相手になり、誰にも悩みを打ち明けられずに早期退職をしてしまうという事態を防ぐことができると考えている。定着率がアップすることで他社との差別化ができ、より良い採用にもつながっていくため、今後も早期離職を防げるように継続して研究をしていきたい。

【会場賞】

私だって参加したい！

～新企画『かたつむりツアー』～

大阪〈ゆうゆうの里〉生活サービス課

○門田拓也 和田貴徳

【目的】

大阪〈ゆうゆうの里〉では自立の入居者と要介護の入居者のイベントは随時開催されていた。しかし、どちらの対象でもない杖や押し車を常時使用している方や軽度認知症の方へのイベントの企画やお誘いなどが不十分であった。また、体力の衰えなどがあり参加したくてもできない状況の入居者もいた。イベント参加に消極的になってしまった入居者に楽しんでもらえるよう、新たな外出イベント『かたつむりツアー』を計画し、研究に取り組んだ。

【方法】

- ・期間：2021年4月～2023年5月までに3回実施
- ・対象：自立歩行が不安定な方・認知症高齢者の日常生活自立度Ⅱレベルの方
- ・内容：自立の入居者とほぼ同じツアー内容を別日で実施
参加人数は少数で、職員のサポートを手厚くした
ポスター掲示し、イベント参加の声掛けを行った
『かたつむりツアー』に参加された入居者8名にアンケートを実施して、これまでの取り組みを評価した。
- ・倫理的配慮：倫理的配慮に関して、本研究は個人情報などを含まない。

【結果】

- ・ツアーのボリューム
多かった…0% やや多かった…0% 丁度よかった…100%
やや少なかった…0% 少なかった…0%
- ・スタッフの対応
大変よかった…87% よかった…13% 普通…0%
悪かった…0% 大変悪かった…0%
- ・総合的な満足度
大変満足…25% 満足…75% 普通…0%
不満…0% 大変不満…0%
- ・次回も参加したい
また参加したい…100% どちらともいえない…0% もう参加しない…0%

【考察】

『かたつむりツアー』は入居者に楽しんで参加してもらうことができた。「外出行事は諦めていたけれど職員のサポートのおかげで安心して参加できた」「次回の開催が待ち遠しい」などの声をもらうことができた。また、自立の入居者のツアーとほぼ同様の内容にすることによって、お互いの旅行話をする場面がみられた。『かたつむりツアー』をきっかけに入居者同士のつながりができ、他のイベントへの参加率もあがった。

【結論】

『かたつむりツアー』は年間2回の開催に加え、入居者からの要望があった観劇ツアーなども取り入れていきたい。また、今後は元気な入居者がより元気になるようなイベントや男性入居者向けのイベントなど、様々な入居者のニーズに沿った企画を考えていきたい。